

特

集

バラ科果樹における胴枯細菌病の発生状況と防除対策 ナシ胴枯細菌病の発生生態と防除対策

佐賀県果樹試験場 ^{まえ}前 ^だ田 ^{こう}貢 ^き輝

はじめに

本県のニホンナシ（以下、ナシ）は、県西部の伊万里市を中心に主力品種‘幸水’、‘豊水’のほかに‘あきづき’、‘新高’および‘王秋’等が栽培されている。作型としては早期出荷や病害抑制を目的とした加温栽培やトンネル栽培が盛んであり、2023年の結果樹面積は166 ha、生産量は3,500 t、特に両施設栽培の総面積は約82 haと全国1位を誇っている。

このような中、本県のナシ生産現場において、近年若木を中心に胴枯細菌病の発生が増加している。本病の発生生態については不明な点が多く、また、農薬登録もないことから、生産現場では対応に苦慮している。また、今後生産が本格化していく若木での発生が多いことから、生産者へ与える経済的ダメージも非常に大きい病害である。

そこで、今回は、本県におけるナシ胴枯細菌病の発生動向や防除対策など、現時点で分かっていることについて紹介する。

I 病 徴

ナシ胴枯細菌病の発病樹は、主に主幹部または主枝の分岐部付近から赤褐色の樹液を漏出し、アルコール臭を発することが多い（図-1）。また、赤褐色の樹液が乾燥すると図-2のようにさび色の樹液漏出痕となる。発病樹では、主幹部や根の一部に部分的な褐変または枯死が認められ、病勢が進行すると、最終的には樹全体が枯れる傾向がある。

また、樹体内の病徴として、ナイフ等で表皮を削ると表皮下部および形成層が褐変している様子が認められ、この病徴は、根から地上部の樹液漏出部付近まで連続している。樹液漏出部より上方では形成層の褐変は認められず、表皮下部のみの褐変となる場合が多く、さらに上方になるといづれの病徴も認められなくなる。



図-1 赤褐色の樹液の漏出

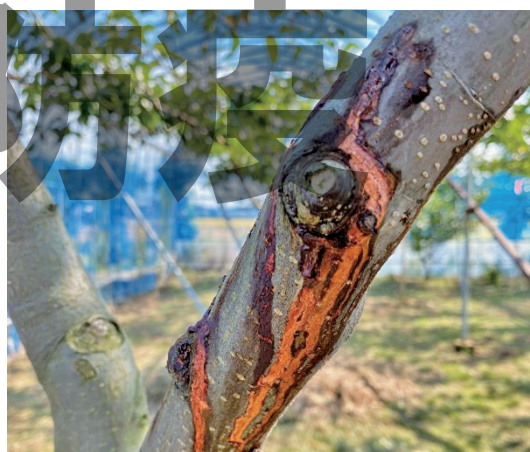


図-2 樹液の漏出痕

ほかの樹種（リンゴ、モモ）の場合、本病の発病後は急激に枯死することが多いが、ナシの場合は、数年を経て緩やかに枯死に至ることが多い。一方、発病後、当該年の収穫後～冬期に枯死する場合もあれば、樹液の漏出が認められた後、ほかの樹種と同様に、急激に枯死する事例も認められている（図-3）。

生産現場においては、赤褐色の樹液の漏出痕によって発生に気付くことが多いが、病勢の進行が緩慢な樹では、樹液漏出量が少ない、ないし認められない、もしくはアルコール臭がしない場合もあり、外観だけで判断するのは困難な場合もある。このような場合でも樹体内の病徴は示すことが多いことから、若干の樹液の漏出など

Ecology and Control Measures of Japanese Pear Bacterial Canker.
By Kouki MAEDA

（キーワード：ニホンナシ、胴枯細菌病、生態、防除対策）